『官場現形記』の真偽問題

樽本照雄

はじめに

『官場現形記』の後半は李伯元の作ではない，とする説がある。

それも昨日今日の問題提起ではない。李伯元の友人・欧陽鉅源が書いたものだ，いや，そうではない，と現在に至るまで約55年間にわたって意見が対立したままだ。

仮に，『官場現形記』後半が李伯元の作ではないとなれば，どうなるか。『官場現形記』の記述をもとに，李伯元の政治的立場，思想傾向，作家意識をさぐっていた大方の論文は，その立論の根拠を瞬時にして失う。

作品の真偽は，いうまでもなく根本問題である。問題がすでに提起されているにもかかわらず，意図的に不問にしているのか，あるいは単に気がついていないのか，ほとんどの論文が「李伯元の書いた『官場現形記』」を既成の事実として論を展開しているのは，不思議なことだ。

真偽問題の発生と展開

胡適の場合　『官場現形記』の後半，特に五編（巻49～巻60）は李伯元の作ではない，と言い始めたのは胡適である。

証言1：胡適「官場現形記序」

官場現形記は彼〈注：李伯元〉の最も長い作品であり，光緒辛丑(1901)

より癸卯（1903）までに前の3編が成った。各編12回である。続く2年（1904〜5）でさらに1編が成立した。翌年（光緒丙午，1906），彼は死去してしまった。本書の第五編は別人が第60回まで続けて無理矢理終わらせてしまったのかもしれない。[1]（傍点樽本。以下同じ）

胡適の偽作説は，『官場現形記』製作時期と李伯元逝去の時間的ズレに根拠をおく。すなわち，初編から四編は1901年より1905年の間に書かれたが，李伯元は1906年に死亡してしまった。故に，残る五編は他人の作品である，というわけだ。

胡適の文章は，魯迅の『中国小説史略』をもとにしている。念のために魯迅の記述も見ておく。

証言2：魯迅「清末之譴責小説」

宝嘉〈李伯元〉は，また商人の依頼に応じ『官場現形記』を書いた。全10編各編12回を予定し，光緒二十七年〈1901〉より二十九年〈1903〉まで3編が成り，続く2年でさらに2編が成立した。三十三年（ママ）三月，肺病で死去するが，歳は四十（1867—1906），該書はついに完成せず。[2]（樽本注：文中にママと注した光緒三十三年というのは三十二年〈1906〉の誤りである。「該書はついに完成せず」とは，120回まで書かれなかった，の意）

製作時期のみを問題にすれば，5編60回を書きおえて李伯元は死去したとするのだから，この魯迅の文章からは偽作説の出てきようがない。しかし，胡適は，魯迅の記述をほとんどそのままふまえているにもかかわらず，重要なところを1カ所だけ書き換えた。傍点部分「2編」を「1編」としたのだ。そうすると，李伯元死亡時には五編が成立していないことになり，偽作説が出てくる。

1）胡適「官場現形記序」上海亜東図書館本『官場現形記』1927．11初・1933．8四版。『胡適文存』三集巻6，上海亜東図書館1930．9初・1936．12五版768頁。『中国章回小説考証』実業印書館1942（初出未見），上海書店影印1979.12，438頁。魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12，20〜21頁。以下『資料』と略す。

2）魯迅「第28篇　清末之譴責小説」『中国小説史略』所収。北京新潮社出版下巻1924．6（初出未見）。訂正本，上海北新書局1931．7初版356頁。『資料』2頁。

だが，胡適が何によって魯迅説を書きかえたのか，わからない。根拠そのものが不明確というのが，胡適の偽作説の弱点である。

阿英の場合　胡適に続いて偽作説をとなえたのは阿英だ。1935年，偽作説をうち出した阿英は，1955年まで――あるいは1977年彼が逝去するまでと言ってもいいが，一貫してその主張をかえていない。

『官場現形記』と『海天鴻雪記』には，茂苑惜秋生の序がついている。当時，魯迅と胡適によって，茂苑惜秋生は李伯元の筆名のひとつだと考えられていた。阿英は，論文「惜秋生は李伯元の変名ではないこと」(「惜秋生非李伯元化名考」) を書いて，惜秋生は欧陽鉅源のことであり，李伯元とは別人だ，と考証してみせた。そのついでに，『官場現形記』の最後の数回は欧陽鉅源の手になるものではないかと問題を提出している。

証言３：阿英「惜秋生非李伯元化名考」

３―ａ　李伯元は『活地獄』を第39回まで書いて死去した。呉趼人がまず彼にかわって３回を書きつぎ，その後はどういうわけか茂苑惜秋生がかわって続けたが，しかし，１号分を書いただけで『繡像小説』が停刊してしまった。これらは出版時期から考えられることで，決して李伯元ではないことがわかるのだ。その一回〈注：『活地獄』第43回，『繡像小説』第72期掲載〉のほかに，『官場現形記』の最後の数回もこの人〈欧陽鉅源〉が続けたのではないかと，私は疑っている。[3]

３―ｂ　もし『官場現形記』も彼〈欧陽鉅源〉が続けたものであるならば，そうなると第60回こそはより大きな証拠である。彼はあれら官僚たちをまったく「頭ごなしにしかりつけ」ている。感情の面で，茂苑惜秋生の方が李伯元よりもずっと若いのだ。[4]

３―ｃ　『官場現形記』の最後の数回は，〈李伯元の〉名前を出して惜秋生に稿を続けさせてみせたので，おそらく二人の人間の手になるものではなかろう。この点に関しては，近作『李伯元』という単行本ですでに詳細に

3)　阿英「惜秋生非李伯元化名考」『太白』半月刊第２巻第８期上海生活書店1935.7.5，366頁。最近中国より影印版も出された。

4)　同上。367頁。

論及したので，ここではこれ以上くどくど述べない。[5]（下線樽本）

3—aで，阿英は「疑っている」としか言っていないのに，それが3—bでは，あたかも決定しているかのように拡大し，それを補強するために第60回の内容をその証拠にあげる。仮定から得られた結論を，こんどは逆に仮定を補強する証拠として使用するのは論理的でない。阿英は偽作説に強い自信を抱いていたようで，3—cでは「おそらく二人の人間の手になるものではなかろう」と書き，欧陽鉅源が作ったことを強調している。

阿英の強調にもかかわらず，何ら証拠らしきものは提示されていない。3—cの下線部で，詳細に論じた単行本があると書いているが，この下線部分は後に削除されている。同文を収録した上海良友図書印刷公司版『小説閒談』(1936. 6. 10，75頁）および解放後出版された上海古典文学出版社版『小説閒談』(1958. 5，22頁）のいずれにも下線部分はみあたらない。『李伯元研究資料』にも再録されるが，上海良友図書印刷公司版所収のものによったため，当然，これにもない。

『李伯元』という本とは，呉泰昌編「阿英著作目録」にみえる『李伯元評伝』[6]のことであろう。しかし，1934年に書かれた原稿は，鄭振鐸を経由して上海生活書店に渡されたまま，ついに日の目を見ることはなかった。この事実が，下線部分を削除させることになったと想像される。

出版はされなかったが，偽作説を論じたことがあった。阿英にしてみれば，すでに証明ずみの事として意識されてしまったのかもしれない。阿英はその後，『官場現形記』にふれるたびに偽作説をくりかえす。

証言4：阿英『晩清小説史』

『官場現形記』は60回が現存している。李伯元の初めの意図は，もともと10編120回を書くつもりであった。光緒二十七年から二十九年までに3

5）同上。367頁。

6）『阿英文集』全2冊，生活・読書・新知三聯書店香港分店 1979. 6，901頁。阿英「海上買書記」(『海市集』上海北新書局 1936. 11 所収。香港三聯書店『阿英文集』，天津百花文芸出版社『阿英散文選』1981. 6 にも収める）に「李伯元伝」という書名で出てくる。

編を書き，つづく2年で2編弱が成ったが，三十三年に死去し，本書は未完となった。後に，その友人が第五編を完成させ，全部で60回，繁華報館より発行された。[7]

証言5：阿英「『官場現形記』について」（「関於『官場現形記』」）

『官場現形記』5編60回は，光緒癸卯（1903）より編にわけて世界繁華報館から発行された。李伯元は五編を書き終わらぬうちに死去したので，後の数回は茂苑惜秋生（欧陽鉅源）が無理矢理続けて完成させたという。[8]

証言4，5では胡適説をとり入れ，偽作説は阿英にとって確信にかわってしまっているのがわかる。

だが，私にしてみれば，肝心の論証部分が欠落したままだから，何だか放置された格好で，納得がいかない。

阿英によって繰り返し唱えられた偽作説に安易にとびつく論者もでてくる。

証言6：周貽白「官場現形記索隠」

官場現形記は，繁華報にいた時に書いたものだ。辛丑〈1901〉より乙巳〈1905〉まで，全部で4編48回を完成し，丙午〈1906〉に至って死去する。その第5編49回から60回までは他人の続作である。（中略）阿英の小説閒談では，官場現形記のうしろ12回は茂苑惜秋生が続けたものだとしているが，すこぶるその可能性がある。[9]

周貽白自身は論証をしておらず，ただの受け売りというよりほかない。

北京人民文学出版社張友鶴校注本『官場現形記』（1956．6）において，同社編輯部も，李伯元は作品を完成しないうちに病没したため，最後のごく一部分は友人が補ったものだ，と説明している。

7）阿英「第11章　官僚生活的暴露」『晩清小説史』上海商務印書館1937．5，198頁。北京作家出版社版1955．8，129頁。北京人民文学出版社版1980．8，129頁。
8）阿英「関於《官場現形記》」『小説三談』上海古籍出版社1979．8，206頁。
9）周貽白「官場現形記索隠」『文史雑誌』第6巻第2期1948．5．15，56頁。

最近のものでは，林瑞明が阿英説を踏襲する。[10]

以上，胡適，阿英に代表される偽作説の根拠は，わずかに胡適のいう，李伯元の死亡時にはまだ第五編は書かれていなかった，という点（証言1）に集約されるだろう。その他，阿英を含めて証拠らしいものは何もあげられていない。

反論　偽作説を否定する論も，当然，存在する。解放前，解放後を通じて明らかな形で最初に疑義を表明したのは李錫奇だ。

李錫奇は李伯元と同族で，伯元が死去した時，十七歳であった。伯元は生前に錫奇の家に一時期滞在したことがあったらしい。李錫奇は，伯元の人となりを知っている貴重な存在のひとりだと言えるだろう。

証言7：李錫奇「李伯元生平事蹟大略」

ある人は『官場現形記』の後半部は，例の報館〈注：世界繁華報館〉の助手・欧陽鉅源が続けて完成させたものだ，と疑っているが，それは事実ではない。そもそも伯元の生前に，私はその本全部を読んでいたが，『繁華報』自印の四号活字の版本であった。この本には茂苑惜秋生の序がついている。ある人は欧陽鉅源の作になるものだといい，また，茂苑惜秋生は決して欧陽鉅源ではないという人もいる。考えるに，伯元は光緒丙午〈1906〉三月に没したが，しかし，該序は光緒癸卯〈1903〉中秋後五日に成っており，それはすなわち伯元が逝去する4年前である。故に，これまた伯元の自作という可能性もある。[11]

李伯元を実際に見知っている李錫奇にして，偽作説を否定する根拠を示すことができない。「それは事実ではない」と頭ごなしに極め付けているだけだ。さらには，茂苑惜秋生の序は李伯元の作かもしれないといっているが，これまた彼の根拠のない想像にすぎず，これでは反論にならない。

魏紹昌の場合　反論の体をなしているのは，唯一，魏紹昌の論文のみである。

10）林瑞明「第3章　官場現形記与晩清腐敗的官場」『晩清譴責小説的歴史意義』国立台湾大学文学院1980．6，64頁。

11）李錫奇「李伯元生平事蹟大略」『雨花』第4期1957．4．1（初出未見）。『資料』33頁。

「『官場現形記』の著作と刊行問題」(「《官場現形記》的写作和刊行問題」)と題されたこの論文は，魯迅『中国小説史略』の李伯元部分に関する記述〈証言2を参照〉に疑問を呈したものだ。疑問――回答の順に魏紹昌の見解を紹介する。問題はみっつある。

その1：『官場現形記』は「商人の依頼に応じて」書かれたというが，本当か。――李伯元自身の経営する『繁華報』に連載していたのだから，それはありえない。

その2：『官場現形記』の連載期間は1901年より1905年としているが，はたしてそうか。――現存する『世界繁華報』9部の連載情況から推測して，第1回は1903年四月に始まり全編は1905年六月に完結されたとする方が正しい。

その3：作者死去のため60回で未完に終わったのか。――第60回末尾の記述から見て，作者としてはこれで終了させるつもりだった。続けて，さらに60回を書く目論みなどなかった，と推測する。

魏論文で重要なのは，李伯元の生前に『官場現形記』は完結していた，という点だ。

この次が肝要な部分である。

証言8：魏紹昌「《官場現形記》的写作和刊行問題」

李伯元は前半部〈注：5編60回〉でさえ完成しておらず，最後の小部分はやはり彼の友人がかわって補ったものだ，とある人は考えている。注) この種の論法にどういう根拠があるというのだろうか。作者が病没して，「該書はついに完成せず」から生じた誤解であろうと私は推測する。『官場現形記』は1905年六月には新聞紙上ですでに連載を完了しており，全部は遅くとも1906年正月にはもう出そろっていた。また，李伯元は1906年三月十四日に死去したが，彼がわずらっていたのは慢性肺結核で，その年の二月に発行された『繡像小説』第69期には，彼の書いた『活地獄』がまだ続けて発表されている。このことから，李伯元の筆は死に至ってやっと手放されたものであることがわかる。『官場現形記』の成立はそれ以前であったからには，李伯元にかわって友人が補う必要がどうしてあったであろ

う。[12]

文中の注で魏があげる「ある人」というのは，胡適と阿英である。

胡適の偽作説がよってたつところは，李伯元が死去した時点で『官場現形記』は完結していなかった，という点にある。しかも，これは実証されていないのだ。魏紹昌は，胡適説の弱点を狙いたがえず突いている。

1927年，胡適の偽作説が唱えられて以来，36年目にしてようやく実証的な反論が加えられた。これで問題は一挙に解決した，とこうなればめでたいことで，私もこんな論文を書く必要などない。ところが，そうは問屋が卸さない。

李伯元を知る人物が，李伯元の原稿の多くに欧陽鉅源の筆が加わっていた，と証言しているのだ。

新たな展開 『官場現形記』の「代作者」としてしばしば名前があがっている茂苑惜秋生とは，本名を欧陽淦という。字は鉅元（又は鉅源），原籍，生年ともに不明。蘇州に住み，十四，五歳で秀才の資格を得た。彼と同じ試験を通過したのが包天笑である。1898年冬，上海に出た欧陽は，『游戯報』に投稿したのが契機となり李伯元と知り合い，以後彼の有力な助手となった。上海の張園で包天笑に李伯元を紹介したのもこの欧陽である。約8年間，李伯元の仕事を手伝い，1906年三月李伯元が死去すると『世界繁華報』の編集を引き継ぐが，1907年十二月，花柳病をわずらい上海に客死した。二十五歳，あるいは三十歳にも満たなかったという。

彼の作品には，蘧園という筆名で「負曝閑談」30回を『繡像小説』（第1～41期）に連載，「維新夢伝奇」の前半6齣も同じく『繡像小説』（第1～6期）に惜秋生名で掲載している。李伯元の「活地獄」を第43回のみ茂苑惜秋生名義で執筆したことはすでに述べた。その他，病紅山人龐樹柏との合作「玉鈎痕伝奇」がある。

この欧陽鉅源と親しい間柄であり，生前の李伯元とも面識のあった包天笑は，次のような証言を行なっている。

12) 魏紹昌「《官場現形記》的写作和刊行問題」上海『文匯報』1962. 7. 11。『資料』117頁。なお，この論文について紹介したことがある（樽本照雄「魏紹昌氏の李伯元に関する2編の論文」『中国文芸研究会会報』第18号1979. 2. 27)。

証言 9 ：包天笑「晩清四小説家」

後に鉅源は私に次のように話した。彼〈注：李伯元〉の『游戯報』は，まったく鉅源に委ねられており，自分はまったく執筆しようとはせず，つまり，小説もまた鉅源が代作していて，伯元は一日中応待交際をするばかりで花柳界の管理役をつとめていただけだ。（中略）欧陽鉅源のいうところによると，伯元の多くの小説はすべて彼が代作したもので，伯元の名前を用いたにすぎない。ただし，『官場現形記』も彼〈欧陽鉅源〉の筆になるものかどうか，彼にたずねたことはなかった。（伯元は官界の事に熟知していたから，彼自身が書いたものにちがいないと私は思う）『文明小史』等であれば，私は原稿を見たことがあるが，たしかに鉅源の筆が加えられていた。[13)]

該文の初出（『小説月報』第19期に掲載された）を私は見ておらず，『李伯元研究資料』から孫引きをした。だから，『官場現形記』は李伯元の自作にちがいないと考えるカッコ部分がはたして初出誌にあるのかどうか，判断できない。というのは，魏紹昌の「茂苑惜秋生其人其事」に同じ個所が引用されているのだが，カッコ部分は削除してあるからだ。かりに初出誌にカッコ部分があるとしても，これは包天笑の想像を述べたにすぎない。『文明小史』等に欧陽鉅源の手が加わっていて，『官場現形記』のみにはそれがないと言い切れるだろうか。事実，包天笑の後の文章には，最初の強い否定は徐々に姿を消していっている。

証言10：包天笑「茂苑惜秋生の事を補述する」（「補述茂苑惜秋生事」）

ある人はかつて私に次のように言ったことがある。「『官場現形記』の始めは李伯元自身が書いたものだが，後には伯元が収集した材料を欧陽に渡して書かせたものだ。彼は応待交際に忙しく，手間をはぶく方をよろこんだ」この通りであったかどうか，私は欧陽にたずねなかった。（中略）

某君が言うように『官場現形記』には大半欧陽の手が加わっているとす

13） 包天笑「晩清四小説家」，「釧影楼筆記」『小説月報』第19期1942．4（初出未見）。『資料』28頁。〔追記〕参照。

るならば，情状を酌量して許すべきだ。[14]

最初の強い否定とは打って変わった記述である。

包天笑は欧陽の友人として，彼の境遇の不遇なことを一貫して擁護する。たとえば，李伯元の死後，欧陽に『繁華報』を乗っ取ろうとする意図があったと非難する論者がいる。[15] 包天笑はこれに対して，『繁華報』は7，8年来ずっと欧陽によって維持されていたので，彼の方が李伯元の親族に追い出されそうになったのだと弁護する。

欧陽を擁護するのは結構なことである。しかし，それがどうして『官場現形記』に手を入れたことは「情状を酌量して許すべきだ（原文：更当原諒）」となるのか，私は理解に苦しむ。

証言11：包天笑『釧影楼回憶録』

ある人は，「官場現形記」の後半部はすべてその〈注：欧陽鉅源〉手になるものだという。[16]

「ある人」とは阿英あたりをさすのであろう。ここに至ってまったく疑問は呈示されなくなっている。偽作説に大きく傾いたと言えるだろう。

繰り返すが，包天笑は『文明小史』等の原稿に欧陽の筆が加わっているのを見ているのだ。『官場現形記』にはそれがないと断言できるだろうか。

李伯元の生前ですら，彼の名を冠した作品に欧陽鉅源の手が入っていた，という事実を前にすれば，李伯元の存命中に『官場現形記』は完成していたので，李伯元自身の作品に違いないとする魏紹昌の立論は成立し得ない。

『官場現形記』には欧陽鉅源の筆になる部分があるのかないのか，問題は振り出しにもどってしまった。

李伯元の死亡時期と『官場現形記』の連載時期が判定の根拠とならないなら

14）包天笑「補述茂苑惜秋生事」香港『大公報』1962．8．1。『資料』496，497頁。
15）李錫奇「李伯元生平事蹟大略」『資料』33頁。樽本照雄「『官場現形記』裁判」『中国文芸研究会会報』第33号 1982．4．1を参照。
16）包天笑『釧影楼回憶録』香港大華出版社1971．6，142頁。

ば，それにかわるものは他にないのか。

私なりの答えを出すための材料として，世界繁華報館増注本『官場現形記』が使用できるのではないかと考えている。次に増注本の説明から始めよう。

増注本『官場現形記』

増注本　たて17.3㎝よこ11.2㎝，日本でいう新書判に近い。活版線装本。半葉12行，各行23字，三号大活字を使用，割注を施す。版心の，上から「官場現形記」，魚尾の下に巻数，丁数，「上海世界繁華報館校刊」と記してある。世界繁華報館原本と版式は同じであるが，異なる点は，増注本という呼称の由来する割注があることと，表紙の印刷外題（原本は題簽）である。印刷状態は増注本の方がより鮮明だ。

手元にあるのは，残念ながら7冊（四編――巻37～39／巻40～42／巻46～48／五編――巻49～51／巻52～54／巻55～57／巻58～60）のみである。端本だから，増注者名および刊年ともに記入されていない。

増注本には絵図を加えた粤東書局本（1904年十一月，石印線装本，4編48巻と五編巻52～60を既見）と崇本堂本（刊年不記，石印線装本，3編36巻を既見。魏紹昌によると増注者欧陽鉅源，滬遊雑記と記した1909年二月改訂初版本があるという）[17] が存在し，両書は基本的に同文である。

対照してみると，世界繁華報館増注本は，この粤東書局本，崇本堂本ともおよそ同文であった。世界繁華報館というのは，『官場現形記』原本を出版しているところである。ということは，同じ世界繁華報館を記すこの増注本は，とりもなおさず粤東書局本，崇本堂本のもと本であり，その作者は李伯元の親密な友人・欧陽鉅源のほかには考えられない。

粤東書局本に記された1904年十一月という時点では，『官場現形記』は『世界繁華報』紙上に連載中のはずであり，この増注本は新聞連載および分冊で出されていた原本と並行して発行されたことになる。[18]

17）『資料』72頁。

18）樽本照雄「『官場現形記』の初期版本」『中国文芸研究会会報』第31号1981. 12. 1。『清末小説研究会通信』第12号1981. 11 1。同第16号1982. 3. 1。

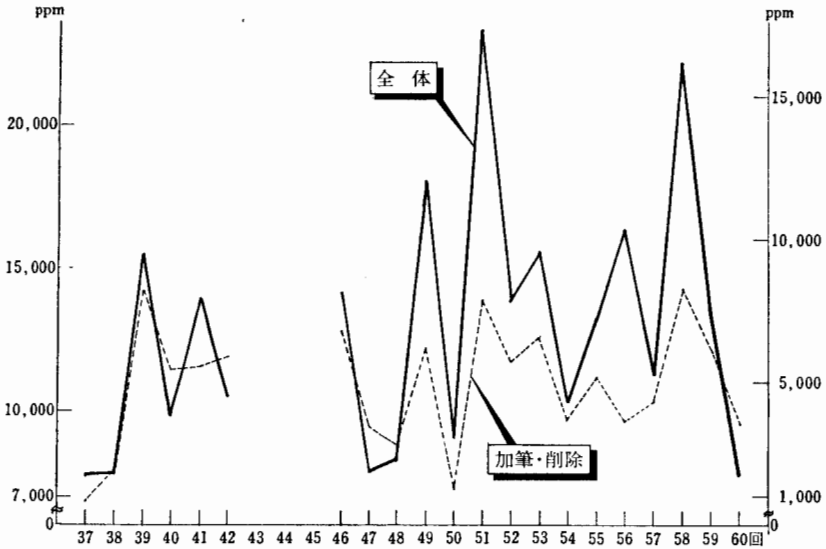
手続き　世界繁華報館から，時間的に極めて接近して発行された原本（東洋文庫所蔵本を使用）と増注本という2種類の『官場現形記』を比較検討してみる価値は充分にありそうだ。

そこで，原本と増注本の本文を対照し，加筆，削除，書換，入換がそれぞれ何字あるかを調べた。各巻の総字数（回目，署名を除く）のうち，それらの占める割合を百分率ではなく百万分の1の単位 ppm で表記したのが「表・『官場現形記』書き換え率」である。加筆，削除，書換，入換を総称して「書き換え」ということにする。

表・『官場現形記』書き換え率

回	総字数	加筆	削除	書換	入換	書換率(ppm)
37	7977	2	5	51	4	7772
38	8830	7	10	49	3	7814
39	7874	8	57	52	5	15494
40	9662	14	39	39	3	9832
41	7534	11	31	53	10	13936
42	7558	5	40	32	3	10584
46	9485	18	47	43	26	14127
47	7280	3	22	31	2	7967
48	10257	12	17	48	9	8384
49	11195	14	56	124	8	18043
50	11806	5	10	77	15	9063
51	11559	20	77	163	10	23358
52	10581	18	43	77	9	13892
53	9594	10	54	75	10	15530
54	8476	14	18	44	12	10382
55	11702	16	45	89	5	13245
56	13619	10	39	165	8	16300
57	8345	6	30	43	16	11384
58	10633	18	134	67	17	22195
59	8516	16	37	59	5	13738
60	7392	5	21	28	5	7981

巻1～36と巻43～45は，世界繁華報館増注本が手元にないので比較していない。最初，粤東書局本，崇本堂本で欠をおぎなうことができると考え，対照しはじめた。ところが，くわしく見ていくとこの増注絵図両版本間に異同のある



図・『官場現形記』書き換え率

ことが判明したのだ。原本と両増注絵図本の巻1をならべてみると，粤東書局本のみの相異個所が3ヵ所,[19] 崇本堂のみの相異個所が52ヵ所,[20] 両本とも原本と異なる個所が1ヵ所あった。[21] これでは筆耕者の手がさらに加わっていることになり，もとの世界繁華報館増注本のかわりに使用するには危険が大きすぎる。

書き換え率表を図になおしたものを掲げる。書換と入換は誤植を訂正したものも含まれるので，念のため加筆と削除だけのものを破線で示しておいた。

読解　表および図から読みとれる事実は次の3点である。

事実1：書き換えがある。

事実2：書き換えの多い巻とそうでない巻がある。

事実3：五編のみならず，それ以外にも書き換えがある。

以上3つの事実はお互いに関連しあっているが，これからいくつかの読解が

---

19)　1ウ（原本）必開因見⟶（粤東）必開因因見⟶（崇本）必開因見

20)　たとえば，1ウ（原本）有両顆合抱＝（粤東）有両顆合抱⟶（崇本）有両個合抱など。

21)　5オ（原本）一定要辞館⟶（粤東）一定館⟶（崇本）一定辞館

できるだろう。まず，否定的なものから。

読解１：原本はあくまでも李伯元の作で，欧陽鉅源は増注本を作る際にのみ手を入れた。

読解２：書き換えといっても ppm を使用するくらいの少なさであって，問題にするにはあたらない。

読解１に対する問題はこうだ。欧陽が本文に手を入れ，注を施したものが，なぜ，原本と同じ世界繁華報館から出版されたのか，また，李伯元はなぜそれを黙認したのか，その理由を説明できない。

読解２でいう「書き換えの少なさ」であるが，これは「量」の問題ではない。作者自身による書き換えであるならば問題は別だ。しかし，他人による書き換えとなると，そのこと自体がおかしなことなのだ。

つまるところ，書き換えがあるという事実（事実１）をどう考えるかにかかっている。

増注本は李伯元の生前から出ている。しかも李伯元のおひざ元である世界繁華報館から出版されているのだから，彼の承認がなければ考えられない事だ。原本が李伯元のみの筆になるものならば，それを書き換えた増注本を刊行することを李伯元は許したであろうか。それが出版されている事実は，すなわち，

読解３：原本自体に欧陽鉅源の手が入っている，

ことを証明している。はじめから欧陽の作になる部分があったからこそ，それを書き換えた増注本を出版することを李伯元は認めたのである。

では，どの部分が欧陽の作か。これを判断するのは困難である。しいて言うならば，事実２から，

読解４：書き換え率の高い巻は李伯元の作である。あるいは，正反対で，欧陽鉅源の作である，

と考えられる。書き換え率の高い巻⟶李伯元の作である，というのは，「他人の作品には手を入れたくなる」と考えたからだ。その反対に，書き換え率の高い巻⟶欧陽鉅源の作である，とは，「自分の文章だから勝手に手を入れる」ということだ。

欧陽鉅源の場合は，どちらかといえば前者ではないかと想像する。というの

は，曾孟樸『孽海花』の例があるからだ。同書最初の数回は金松岑の原稿をもとにしている。20年後，曾孟樸は改訂版を書いているのだが，その際，最初の数回には大幅な修改をほどこしている事実がある。ここには他人の作品には手を入れたくなる作者の心理がうかがわれるのではないか。

いずれにせよ書き換えがあること自体，欧陽鉅源の手になる部分が原本にあったことを示しているならば，事実3の五編以外にも書き換えがあるという事は，

読解5：『官場現形記』全体にわたって欧陽鉅源がかかわっている可能性が高い，

ということになる。

結論　欧陽鉅源の手が加わった原稿でも発見されない限り，『官場現形記』が偽作であるかどうか確定することはできない。しかし，原本と増注本を対照した結果，『官場現形記』の作成には欧陽が一枚かんでいる可能性が高いことがわかった。李伯元と欧陽鉅源の親密な関係を考えれば，「偽作」というよりは二人の「共同作品」として『官場現形記』をとらえる方がいいだろう，というのが現在の私の結論である。

（たるもと　てるお）

〔追記〕　後日，聯華版『小説月報』を入手した。20頁で未見とした釧影（包天笑）「晩清四小説家」（初出は「清晩四小説家」とする。「釧影楼筆記」〈七〉『小説月報』第19期1942．4．1，34—35頁）にはカッコ部分があることを確認した。